

分裂すると種になるという考えのラフスケッチとその検討 一人の同一性の問題における分裂のケース—

福田 敦史

はじめに

人の同一性の問題において、分裂の事例と呼ばれるパズル・ケースが取り上げられることがある。この事例では、あるオリジナルの人物とまったく同じと思われるような人物が二人（以上）現れるような状況が提示される。本来一人である人物が、アメーバのように二人の人物に分裂したとするならばその同一性はどうなるのか、というものであるから、非常にパラドックス的な状況である。

このパラドックス的な分裂の事例に関して、本稿では、分裂によって、分裂前の人物が種になると捉える考えを簡単に紹介し、検討したい。第1節では、まず分裂の事例というものを説明する。続く第2節で、この分裂の事例のパラドックス的な面について確認する。第3節では、分裂のケースに関して、分裂前の人物は種になると捉える考えを紹介し検討する。4節の補論では、分裂前の人物が種になると捉えたとしても、まだ残されるように思われる人の同一性の問題における論点についてふれる。

1.

哲学において、例えば、あるときの存在者とあるときの存在者とが同一の人（person）であるための必要十分条件は何か、というかたちで問われる「人の同一性（personal identity）」の問題というものがある¹。この問題の具体的な事例としては、例えば、今、ディスプレイの前で、あれこれ考えながらキーボードを叩いている福田敦史と、40年前のマラソン大会の時に、中学校の校庭を荒い息づかいで走っていた福田敦史とが、同じ人であるためには、何が必要であり、かつ、十分であるか、というものになる。

¹ 'person' の訳語としては、伝統的に「人格」という語があてられることもあるが、本稿では、「人」あるいは「人物」の語を用いる。「人」と「人物」との使い分けは、もっぱら表現上の都合からであり、本稿で、これらの語の意味に違いはない。

この、人の同一性の問題において取り上げられるパズル・ケースに、分裂の事例というものがある。ここで「分裂」と訳されている 'fission' は、通常、核分裂や、アメーバなどの単細胞分裂を意味する語である。もちろん、現実の人が分裂することは（少なくとも現在までのところ）ないので²、分裂の事例は、もっぱら思考実験の問題として取り組まれる³。

分裂の思考実験には、さまざまなヴァリエーションが考えられるが、例えば、次のようなものを想定してみよう。まずここに、未来人によって作られた、人を転送することのできる機械があるものとしよう。その詳細は不明だが、この転送機のシステムは、送信機に入った人物の身体的要素と心理的要素とを完璧に読み取り（と同時にその人物の細胞を消去していき）、読み取ったデータを受信機に送り、その人物を元通り作り上げる、ということのできるのである⁴。したがって、この機械の送信機に入った人は、受信機からそのまま出てくることができ⁵。加えて、この送信機と受信機とは空間的に隔たった距離をおいて設置することもできる。すると、例えば、東京に設置された送信機に入った人が、読み取られたデータとして転送され、札幌に置かれた受信機から出てくる、ということが可能

² しかし、受精卵が人であるならば、人も現実に分裂する。もちろん、受精卵を人と捉えなければ、やはり人は分裂することはない。いずれにせよ、分裂の問題が脳分割の事例以上に、現実の問題であることを柏端(2022)によって教えられた。

³ とはいえ、分裂のケースとしてしばしば取り上げられてきた「脳分割 (split-brain)」の事例は、当初から、単なる空想上のものとしてではなく、現実味を帯びたものとして導入されてきた。

⁴ あるいは、身体的要素を完璧に読み取り完璧に再構成することにより、心理的要素も完璧に実現される、と捉えてもよい。

⁵ ここで当然、果たして「そのまま」と言えるのか、すなわち「同じ人」と言えるのか疑問に思う人もいるだろう。例えば、デイントンは、Dainton (2008) においては、このような転送システムによる同一人物の移動を許容しているように思われるが、その後のDainton (2014) では、こうした転送のケースの場合には、人が情報やデータとして処理されているあいだ、人は意識（意識経験）を持つことができず、意識のつながりであるC-continuityが絶たれるため、同じ人が生存し続けることはできない、としている。

なのである⁶。この転送機システムを利用することで、遠方への長距離移動を、より簡便なものすることが期待できるかもしれない⁷。

ここまでは、まだ分裂の事例に至っていない。そこで、この転送機のシステムでは、送信機とリンクされて同じように機能する受信機を複数台設置することが可能であるでしょう。そして、二台の受信機を、一台は札幌に置き、もう一台を博多に置いたものとする。するとどうなるだろうか。この状況で一人の人物が東京に設置された送信機に入ると、札幌の受信機から一人、また、博多の受信機から一人、と、受信機に入ったこの人物と同じ人物が、それぞれの受信機から一人ずつ、計二人現れることとなる⁸。

いや、「同じ人物」と表現してしまうのは早まっているかもしれない。東京の送信機に入った人物と同一の人物なのは、札幌にいる人物なのだろうか、それとも、博多にいる人物なのだろうか。しかしながら、どちらか一方の人物だけが東京の送信機に入った人物と同一の人物である、ということは困難であるように思われる。というのも、どちらの人物も、東京の送信機に入った人物が、その身体的要素と心理的要素とを完璧に読み取られ、同じように機能する転送機システムの受信機からそのまま出てきているのだから。それでは、札幌にいる人物と博多にいる人物、どちらの人物も、東京の送信機に入った人物と同一の人物なのだろうか。しかし、札幌の受信機から出てきた人物と博多の受信機から出てきた人物とが、異なる人物であることは明らかであるように思われる。それではということで、この

⁶ お好みであれば、タイマー付きの最新転送機を利用してもよいかもしれない。この転送機のタイマーを設定すれば、いつ送信機に入っても、お好みの時間に、受信機から出てくることができる。つまり、この最新転送機は、空間的に隔たっているだけでなく、時間的に隔たった転送も可能なわけである。本稿では、この転送機を使った論点は取り上げない。

⁷ ここで紹介した思考実験の、いわば「元ネタ」であるパーフィットの有名な事例では、地球と火星とのあいだの遠隔輸送が取り上げられる。

⁸ ここで示している分裂のケースに類似したものとして「複製の事例」や「コピーの事例」といったものがある。が、複製の事例の場合、どうしても、オリジナルとそのコピー、あるいは、ホンモノとニセモノ、という組み合わせができあがってしまう。このことを避けるため、本稿では、分裂の事例を取り上げる。つまり、対等な存在者が現れる事例として、分裂の事例を捉えている。

事例で同一の人物などは存在せず、東京の送信機に入った人物は転送の時点でもはや存在しなくなっており、札幌にいる人物も博多にいる人物も、どちらの人物も、東京で送信機に入った人物とは異なる、ということだろうか。しかし、受信機がひとつだけ札幌に置かれていたときには、送信機に入った人と同じ人が受信機から出てきているのではないのだろうか。これが分裂の思考実験の一例である⁹。

2

この分裂の思考実験において成り立つ可能性のある関係性を簡潔に示すため、しばしば以下のような整理がなされる。送信機に入った人をPと表記することにしよう。そして、札幌の受信機から現れた人をA、博多の受信機から現れた人をBと表記することにする。この分裂のケースにおける、これらP、A、Bのあいだに成り立つ関係としては、通常、次の4つがあげられる。

⁹ こうした思考実験の取扱いにはもちろん注意が必要である。いま取り上げた分裂の思考実験においても、どのようにして身体的要素と心理的要素とを読み取ることができるのか不明であるし、その読み取りで、ほんとうに私たち人間の全ての事柄を読み取ることができるのかも不明である。他にも、読み取った情報が本当に適切に送信することができるのか、送られたデータによってどのように人間を再構成することができるのか、などなど、いろいろと分からないことだらけである。一般的に、現実世界からあまりに遊離しているように思われる思考実験や、現実世界と何が共有されていて何が異なる想定なのかが不分明な思考実験、現実世界とは異なる想定がその他の諸々の因子に与える影響についてほとんど考慮に入れられていない思考実験、などなどの場合には、その思考実験から一定の直接的な帰結が導き出せると主張されても、その主張をそのまま安易に受け入れることは控えるべきかもしれない。人の同一性の問題における思考実験の濫用を批判するものに、よく知られた著作としてWilkes(1988)。また、思考実験についての簡潔な説明と共に、思考実験に取り組む際の注意が示される比較的最近の入門的な著作として金杉(2022)がある。

とはいえ、現実離れしているようなSF的な状況の思考実験をとりあげても、適切な議論と哲学的意義を引き出すことは、もちろんできる。最近の著作としては、例えば、飯田(2022)、柏端(2022)など。

- 1) PはAと同一であり、PはBと同一ではない ($P=A, P \neq B$)。
- 2) PはAと同一ではなく、PはBと同一である ($P \neq A, P=B$)。
- 3) PはAと同一であり、PはBと同一である ($P=A, P=B$)。
- 4) PはAと同一ではなく、PはBと同一ではない ($P \neq A, P \neq B$)。

これらの関係をあらためて確認し、簡単に検討しておこう。1)は、分裂前の人Pは、分裂後の一方の人Aと同一であり、他方の人Bとは同一ではない、という関係である。しかし、この関係は支持しがたい。というのも、分裂の事例では、AとBとの両者が、まったく同程度に同じ人である、と言えるような仕方で存在しているからである。この事例では、BではなくてAこそがPと同じ人である、と言えるような材料はない。これと同じ理由から、2)の関係も支持しがたい。AではなくてBこそがPと同じ人である、と言えるような材料は、ここにはないのである。それでは、3)のような関係はどうだろうか。AとBとの両者が、まったく同程度に同じ人であると言えるような仕方存在している、というのであるならば、Pは、AとBの両者と同じ人である、というものである。しかし、この関係も支持しがたい。というのも、 $P=A$ であり、かつ、 $P=B$ であるとする、推移律により $A=B$ となる。つまり、AとBとが同じ人である、ということである。しかし、AとBとが、数的に別個の異なる人物であることは明らかであるといつてよいだろう。なぜなら、AとBとは空間的に異なる位置に存在しているし、分裂の直後からAとBそれぞれの経験内容は異なっているのであるから、時空的位置のみならず、内在的にも両者は異なっており(内的な区別の原理 *un principe interne de distinction*¹⁰の観点からも)、別個の存在者であることは明らかといえよう。残された4)の関係はどうだろうか。この4)は、分裂によって、Pという人は存在を終え、AとBという、互いに別個の、異なる人物が存在している、というものである。4)の関係は、分裂のケースの取り扱いだけをみるならば、それなりの説得力を伴っているようにも思われる。しかし、分裂の事例を提示する前の、受信機がひとつだけ設置された段階でのことを思い出そう。東京の送信機に入った人と札幌の受信機から出てきた人は同一人物だったのではないだろうか。送信機に入ったその人が受信機から現れたのではなかったらうか。

¹⁰ ライプニッツ『人間知性新論』第Ⅱ巻、第27章、§1。

だとすると、一台の受信機の場合には、同一の人物が存続し続けるのに、同じ機能を有した受信機が二台の場合には、その人物は存在を終え、異なる人物が存在し始める、ということになるのは奇妙ではないだろうか。

ここまで確認したように、分裂の思考実験は、人の同一性の問題において、パラドックス的な状況を生み出すものであり、解決がたいへん困難な事例である。

この、非常に解決が困難である分裂の思考実験に関して、本稿で取り上げたい考えは次のようなものである。それは、分裂によって、分裂前の人物は「高階の個体 (higher-order-individual)」ないし「種 (species)」となる、と捉えるものである。次節から、この考えについて説明しよう¹¹。

3

この転送機システムを福田敦史が利用したものとしよう。東京に設置された送信機に福田敦史が入る。すると、札幌の受信機から一人の人物が現れ、博多の受信機からもう一人の人物が現れる。ここで、札幌から現れた人を福田敦史₁、博多から現れた人を福田敦史₂としよう。

¹¹ ここで、これから本稿で紹介する考えについて少し注釈を添えて注意を促しておきたい。これから紹介する考えは、元々、Dainton (2014) において、Johnston (2010) の考えとして短く紹介されていたものが、そのきっかけである。しかし、その後、実際にJohnston (2010) を手に取ってみると、デントンが理解しているジョンストンの考えは、ジョンソン自身の考えとは異なっているように思われてきた。大元のジョンストンの考えに、本稿著者の理解のなかなか追いつかないところがあることもあり、その後は「ジョンストンの考え」として本稿著者が理解したものと、「デントンが理解しているジョンストンの考え」として本稿著者が理解したものと、との両者を下敷きにして、手前勝手に思案する時期が続いた。ところが、こうした状態のところ、本稿作成の最終段階に近づいたところで、しばらく前に読んだ野矢 (2002) が、本稿の内容に密接な（しかも非常にダイレクトな）関連があることによりやく気づき、本稿にさらなる変容がもたらされた。これらの結果、ひとつ注意を促したい。それは、本稿で紹介する考えが（概念的な混乱が見られる可能性が高いという危険性に加え）、最終的に、ジョンストンのものについても、デントンのものについても（そしてもちろん野矢茂樹氏のものについても）、彼らの考えの正確な紹介にはまったくなっていない、ということである。

まず「福田敦史」という言葉の意味、という観点から確認していこう。分裂の時点まで、「福田敦史」という語は、この世界に個体として存在している存在者であるところの、福田敦史という人物を指示する固有名である。このことはおそらく問題ないと思われるが、重要な点なので、繰り返しておこう。分裂前は、福田敦史という一人の人物、ひとつの個体が存在していて、「福田敦史」という語は、福田敦史という、この一人の人物を意味する固有名である。

次に、転送機による分裂が行われるとどうなるだろうか。分裂によって、福田敦史は、福田敦史₁と福田敦史₂とに分裂するのである。ここで提示したい考えというのが、この分裂という出来事によって、「福田敦史」の語が固有名ではなくなり、種を表す種名、ないし「種別概念 (sortal)」を表す名前が変わったと理解すべき事態が生じた、と捉えるものである¹²。この捉え方においては、分裂後、「福田敦史」という語は、福田敦史という種を意味するのであり、分裂後に「福田敦史」という語が直接指示するような個体はもはや存在しない。分裂後は、福田敦史という人物は存在しないのである。

とはいえ、「福田敦史」という種名で表わされた福田敦史という種に属する個体・人物は、ふたり存在している。それは、福田敦史₁と福田敦史₂である。福田敦史₁と福田敦史₂とはどちらも、福田敦史という同じ種に属する個体である。しかし、もちろん個体としては、それぞれ別個の個体であり、別個の人物である。分裂後、種名を表す「福田敦史」という語は、福田敦史₁のことも福田敦史₂のことも、直接的に指示することはできない。福田敦史₁は、例えば、新しく作られた固有名「福田敦史₁」によって指示されることになり、そして同様に、福田敦史₂は、新しく作られた固有名、例えば「福田敦史₂」によって指示されることになる¹³。

もう少し説明を続けよう。福田敦史₁と福田敦史₂とは、それぞれが福

¹² 福田敦史が分裂することで、存在論が変化し、これに伴い言語も変化した、とみることもできるかもしれない。野矢 (2002) 参照。

¹³ もちろん、指標詞を用いて「この福田敦史」や「あの福田敦史」という仕方でも直接的に指示したり、「あるひとりの福田敦史」といった表現で意味したりすることなどは問題なく可能である。このことは他の種名の場合と同様である。

田敦史という種に属する個体であり、別個の人物である。とはいえ、福田敦史₁と福田敦史₂との両者は、転送機システムにより、どちらも分裂前の福田敦史の身体的要素と心理的要素とを完璧に受け継いでいる。したがって、福田敦史₁と福田敦史₂とは、両者とも、分裂前の福田敦史の身体を基盤とした有機組織的な生命システムを引き継いでいるし、両者とも、分裂前の福田敦史と心理的なつながりを有しており、分裂前の福田敦史の経験について「普通に思い出す」ことができる¹⁴。この意味で、福田敦史₁と福田敦史₂とは、どちらも分裂前の福田敦史の「生存者 (survivor)」₁、しかも完璧な生存者である、とみなすことができるであろう。

すると、ここで、次のような疑問がよせられるかもしれない。福田敦史₁と福田敦史₂との両者が、どちらも分裂前の福田敦史の完璧な生存者であるとすると、それは、福田敦史₁と福田敦史₂とは同一の人物である、ということなのではないだろうか。しかしながら、福田敦史₁と福田敦史₂とが別個の個体、別個の人物であることも明らかなのではないか。すると、ここに矛盾が生じているという、分裂の事例のパラドックス的な点は解消されていないのではないかと、といった疑問である。

しかし、このような疑問は誤解に基づくものであろう。まず、福田敦史₁の存在の経歴を取り上げよう。福田敦史₁は、分裂までは、分裂前の福田敦史という一人の人物として存在していた。そして、分裂によって、福田敦史という種に属する福田敦史₁という人物（あるひとりの福田敦史）として存在し始め、現在にいたる。このような経歴全体が、福田敦史₁という人物の存在の経歴である。次に、福田敦史₂の存在の経歴を取り上げよう。福田敦史₂は、分裂までは、分裂前の福田敦史という一人の人物として存在していた。そして、分裂によって、福田敦史という種に属する福田敦史₂という人物（あるひとりの福田敦史）として存在し始め、現在にいたる。繰り返しのようになるが、このような経歴全体が、福田敦史₂という人物の存在の経歴である。福田敦史₁と福田敦史₂は、分裂の前から分裂を経て現在に至るまで、異なる存在の経歴を有する異なる個体、異なる人物である。ただ、福田敦史₁と福田敦史₂は、ある期間、身体的・心的に同質的な存在の仕方をしていた、というだけである¹⁵。

¹⁴ 「普通に思い出す」とは、つまり、通常の私たち同様、思い出せることもあれば、思い出せないこともある、ということである。

おそらく、このような分裂が生じたとすると、社会的・実践的な面で、さまざまな課題が生まれることであろう。例えば、分裂前の福田敦史が行った行為について、その義務や責任、賞罰はどうするのか。あるいは、分裂前の福田敦史が有していた権利、財産といったものなどはどうするのか。分裂後は、福田敦史の完璧な生存者である人物が福田敦史₁と福田敦史₂と二人いるのであるから、どちらか一方にだけ特権的に付与することができるようなものはおそらくないであろう。そうであれば、こうした課題を解決、ないし対応する法律やガイドラインといった取り決めのようなものが必要になるであろう¹⁶。

とはいえ、人物が分裂するという出来事が、今までのところ生じたことがないものなのであるから、こうした事態にすぐさま適切に対応することができなくても当然である。こうした課題に関しては、実際に議論を重ねて決めていくしかないことであろう¹⁷。

¹⁵ 野矢 (2002) :247-255. なお補足しておく、これは分裂の後から振り返ってみた場合である。分裂の前、そこに存在しているのは、一人の人物(固有名「福田敦史」で指示される福田敦史)だけである。

¹⁶ そして、少なくとも、分裂が生じる頻度というものが、取り決めに大きく影響するであろうことは想像に難くない。

¹⁷ 代わりにもう少し形而上学的な問題に取り組むことにしよう。ひとつの問題は、分裂した後、福田敦史₁と福田敦史₂のどちらかが存在しなくなった場合、端的に言えば片方が死亡し、一人が残された場合はどうなるだろうか、というものである。

福田敦史という個体・人物が分裂することによって、福田敦史は「福田敦史」という種名によって表される種になった。そして、この福田敦史という種に属する個体・人物は、福田敦史₁と福田敦史₂との二人である。ここで、分裂後しばらくして、福田敦史₁が亡くなったとしてみよう。つまり、福田敦史という種に属する個体はひとつであり、福田敦史₂一人である。分裂し二人(以上)になったことによって、福田敦史は種となったのであった。ところが、再び、福田敦史という種に属する個体・人物が一人になったのである。現実的な言葉の使用法では、「福田敦史₂」や「この福田敦史」などと言わず、「福田敦史」と言っても、実質、福田敦史₂を指示することができるであろう。今や、福田敦史に属する個体・人物は福田敦史₂しか存在しないのであるから。すると、「福田敦史」は再び固有名に戻るであろうか。

4. 補論

分裂のケースの客観的な取扱いとしては以上のような取扱いでよいと思われる。しかし、人の同一性の問題という形而上学的問題が興味深いのは、この問題においては、主観的な視点 (subjective point of view) ないし一人称的な観点 (first-person-perspective) というものが無視できないように思われることである。この一人称的な観点から、分裂のケースを考えた場合の問題はどうなるだろうか。

ここで念頭にある「一人称的な観点から分裂のケースを考えた場合の問題」とは次のようなものである。福田敦史である私が東京に設置された送信機に入る。転送システムを起動すれば、札幌の受信機から一人、また、博多の受信機から一人、現れるはずである。これらの人物たちは、福田敦史₁と福田敦史₂であるが、果たして私は、福田敦史₁と福田敦史₂のうちどちらなのであろうか。客観的には、福田敦史₁も福田敦史₂も、どちらも福田敦史の生存者である。しかし、私にとっては、福田敦史₁と福田敦史₂のどちらが私であるのか、は大きな問題であるように思われる。この

おそらく、「福田敦史」が再び固有名に戻るということはないであろう。事情は、絶滅を目前にした種に属する一匹ないしひとつの生物の場合と同様であると思われる。ニホンオオカミという種が完全に途絶えた時というのは、ニホンオオカミという種に属する最後のニホンオオカミが死亡した時であろう（なおニホンオオカミは絶滅したとされているが、もちろん最後の個体が死亡するところが確認されているわけではなく、絶滅種として認定されている、ということにとどまる）。例えば、ニホンオオカミがこの最後の一匹になった時点で、「最後のニホンオオカミ」や「あのニホンオオカミ」といった表現を用いなくても、「ニホンオオカミ」という語で実質、この最後のニホンオオカミを指示することはできるであろう。しかし、だからといって「ニホンオオカミ」という語がニホンオオカミという種を表す種名ではなく、固有名になった、ということにはならない。種名は、種名になったからには、固有名になることはないと思われる。

それでは、融合 (fusion) の場合はどうだろうか。福田敦史₁と福田敦史₂とが融合して、一人の人物になった場合である。いまふれた「ある種に属する最後の個体」というケースと同様に考えることができるのであろうか。それとも異なる考え方が必要なのであろうか。

問題は、各自が自分の視点で、分裂後の当事者の視点に立つことでよく理解されるだろう。

この問題に対するひとつの対応は次のようなものである。システムを作動した結果、私は、福田敦史₁か福田敦史₂かのいずれかとして受信機から出てくる、ただそれだけであって特段の問題はない。札幌の受信機から福田敦史₁として私の世界が開けるか、あるいは、博多の受信機から福田敦史₂として私の世界が開けるか、のどちらかというだけである。分裂の前に、私が福田敦史として世界を経験しているように、分裂の後も、私はまったく同様に世界を経験するに違いない。分裂の前に私が「転送された後にどこかでコーヒーを飲もう」と思っていたら、転送後、私は自分がコーヒーを飲もうと思っていたことを思い出し、遮るものがなければ、きっと私はコーヒーを飲もうとするだろう。そしてコーヒーの入ったカップを手にしたならば、私はコーヒーの香りを嗅ぎ、そのコーヒーを飲むことだろう。ただ、こうした私の経験が、札幌にいる福田敦史₁としてなのか、博多にいる福田敦史₂としてなのか、は分からない。けれども、どちらになるかは分からないけれど、必ずどちらかにはなるのだから¹⁸、その時になれば分かる、ただそれだけである、といったものである。

このような考えは比較的多くの論者がとっている対応・立場であると思われる¹⁹。また本稿著者自身もこの立場にたつ。とはいえ、疑問がないわけではない。この立場は、私というものが、その身体的要素や心理的要素といったものとは独立に成立する（してしまう・してしまっている）という論点を含む。しかしながら、本当に、私というものは、その身体的要素や心理的要素といったものから独立に成立するようなものなのだろうか。確かに、私というものが身体的要素や心理的要素に依存しているという証

¹⁸ しかし、このことは本当だろうか。この場合、必ずどちらかは私である、という保証はあるのだろうか。「いや、ない」という答えの可能性は十分にあると思われる。

¹⁹ 実際、例えば、柏端（2022）も野矢（2002）もこの立場にたっているし、そしておそらく永井均もこの立場にたっていると思われる。永井については、例えば永井（2001;2010）を参照。興味深いのは、私をめぐる問題に関して、永井の立場を共有していないと自認する野矢が、この点に関して、永井と同じ立場にたっていると（少なくとも表面上読み取れる限りでは）思われることである。

拠は見いだせないかもしれない。この点は、分裂のケースという思考実験が明らかにしてくれていることである。しかし、もしかしたら、それはただ証拠が見いだせないだけなのかもしれない。証拠が見いだせないだけで、事実は、もしかしたら、私というものは、身体的要素や心理的要素に（あるいは他の何かに？）依存しているのかもしれない。

もうひとつ、この立場が含んでいる論点がある。それは、私というものは単一のものであって、複数にはならない、ということである。確かに、これは認められて当然の論点であるようにも思われる²⁰。しかし、これも本当なのだろうか。私というものが、福田敦史₁と福田敦史₂という複数の人物によって実現される、ということは不可能なのであろうか。確かに、現実にはそのようなことはないようである。またそうした事態を想像することもなかなか難しい。しかし、仮に、私というものが、身体的要素に依存して成立するものだとしよう。すると、分裂前の私は、福田敦史の身体的要素に依存して私である、ということである。そして、分裂した福田敦史₁と福田敦史₂とは、どちらも分裂前の福田敦史の身体的要素を継承している。そうであれば、福田敦史₁と福田敦史₂との両者によって、私であるということが実現される、と考えるのは、それなりに自然なことなのではないだろうか²¹。もちろん、分裂直後は、私は戸惑うに違いない。とてもではないがスムーズに経験を持てるとは思えない。しかし、それでも経験を積むことによって、やがて統合を経て、私であるということが、福田敦史₁と福田敦史₂とで成立している、ということはある得ない話ではないのではないだろうか²²。

²⁰ 私というものがあるとするならば（そして私というものがあるのは確実であると思われるが）、私というものが単純（simple）であり不可分である、と理解するのは自然なことであり、当然のことである。

²¹ 補足しておく、分裂した福田敦史₁と福田敦史₂とのそれぞれに、私が成立して、そのどちらかがこの「私」である、という事態を考えているのではなく（この事態はむしろ「通常の事態」であろう）、分裂した福田敦史₁と福田敦史₂との両者によって、ひとつのこの「私」が成立する、という事態を念頭に置いている。

²² 実は、ジョンストンはこのような立場に立っているのではないかと思われる。そして、デイントンによるジョンストンの理解は、この点を見誤っている可能性がある。

ひとつ確実に言えることは、この「一人称的な観点から分裂のケースを考えた場合の問題」については、本稿で扱った「分裂によって分裂前の人物が種になると捉える考え」を持ち出しても解決は難しいということである²³。

まとめにかえて

本稿では、人の同一性の問題における、分裂の事例と呼ばれる思考実験を取り上げた。そして、この事例に関して、分裂という出来事によって、分裂前の人物が、個体・人物から種になる、と捉える考えに取り組んだ。

この考え自体の十分な理解、そして、十分な批判的検討には至っていない。しかし、それでも、この考えを検討することで、人の同一性の問題、そして、私であるとはどういうことなのかという問題、これらの問題を考える際に探究すべき問題点、ないし、謎を浮き立たせることができることは確かである。そうであれば、分裂という思考実験、そして、個体・人物が種になる、と捉える考えに取り組む意義は十分にある、と言えよう。

²³ とはいえ、小さいながらも、異なる視点・論点を提示することはできているのではないだろうか。

文献表

- Dainton, B. (2008), *The Phenomenal Self*, Oxford University Press.
——— (2014), *Self*, Penguin Books.
- Johnston, M. (2010), *Surviving Death*, Princeton University Press.
- Leibniz, G. W. (1990), *Nouveaux Essais sur l'entendement humain*, GF-Flammarion (『ライプニッツ著作集4人間知性新論④』・『ライプニッツ著作集5人間知性新論⑤』 工作舎, 1993年) .
- Parfit, D. (1970), 'Personal Identity', *Philosophical Review* 80, pp.3-27.
——— (1984), *Reasons and Persons*, Oxford University Press.
- Wilkes, K. V. (1988), *Real People: Personal Identity without Thought Experiments*, Oxford University Press.
- 飯田 隆 (2022) 『不思議なテレポート・マシンの話』 筑摩書房。
- 柏端 達也 (2022) 「分裂する受精卵と分裂する人」『理想』2022年第9号 (第1181)号, 岩波書店, 94-116頁。
- 金杉 武司 (2022) 『哲学するってどんなこと?』 ちくまプリマー新書。
- 永井 均 (2001;2010) 『転校生とブラック・ジャック：独在性をめぐるセミナー』 岩波現代文庫。
- 野矢 茂樹 (2002) 『同一性・変化・時間』 哲学書房。
- 福田 敦史 (2023) 「人の同一性の問題において思考実験が示すこと」『埼玉工業大学教養紀要 (Contexture)』 No.40 (埼玉工業大学基礎教育センター), 47-60頁。